第7章 コロナの時代をいかに生きるか、『立正安国論』に問う

令和2年（2020）11月24日、宗務院において日蓮宗教化学研究発表大会が行われ、その中で「コロナの時代をいかに生きるか、『立正安国論』に問う」と題するシンポジウムを開催した。シンポジウムは、今般の社会情勢はまさに『立正安国論』に示される「天変・地夭・飢饉・疫癘、遍く天下に満ち」（定遺209頁）る惨状である。この主張をいかに受け止め、具体的実践へ繋げていくべきか、ということを目的に議論した。そしてパネルディスカッションのテーマは次の3つであった。

① 今般のコロナの時代に直面した上で、『立正安国論』に参究した結果、どのような考えをもったか。

② 佐藤賢一氏の連載小説『パッション』※第2回分（『小説新潮』7月号）に、『立正安国論』奏進以前の辻説法の内容が描かれる。その中で浄土教徒の発言「法華経に縋れば娑婆で報われるなどと説かれても、容易に信じる気になれない」（463頁）という率直な気持ちに対し、我々は「法華経の悟」（定遺14頁）という立場から、どのように立ち向かうべきか（※現在、小説『日蓮』として、単行本化され、新潮社より発売中）。

③ 日蓮宗、ひいては日本仏教が、社会に対して具体的な提言や行動を示すことは少ない。『立正安国論』奏進という具体的行動を取った日蓮聖人に連なる者として、その教えや宗教的姿勢をどのように社会へ発信していくべきか。

コーディネーターは三原正資現代宗教研究所長がつとめ、5名のパネリストによってディスカッションがすすめられた。主だった発言内容は以下の通りである。

髙佐宣長師（現代宗教研究所元主任）

東日本大震災の際、石原慎太郎都知事（当時）の発言が契機となって、震災天罰論が問題になるなど、天災の受け止め方が議論になった。「大悪は大善の来るべき瑞相なり」（『智慧亡国御書』定遺1130頁）と示されているように、私たち日蓮門下は、厄災に対して、それを「大善の来るべき瑞相」に変えて行く主体的な実践が求められる。日蓮聖人の災難論は単なる天罰論にとどまるものではなく、むしろその先にこそ立正安国思想の本質がある。

影山教俊師（現代宗教研究所元主任）

『立正安国論』の論旨に固執することは、現代人の科学的な現実感に反する。だから自分の心の鏡に安国論の論旨を載せる信行によって、仏国土顕現などの安心を映し出すことが肝要である。これが「内観の科学」、「教化学」の視点である。いま現代に求められていることは、仏教を言語理性によって解析することではなく、瞑想という宗教的実践によって僧侶自らが心の鏡に安心を映し出すという宗教体験をもつことである。

赤堀正明師（現代宗教研究所元主任）

コロナは大量消費社会で不可避的にもたらされた。コロナ禍から何を学び、どう考え、どう行動するかは、各人、各宗教に問われるところである。日蓮門下に即せば、『立正安国論』は釈尊の悟りを、整束した事の一念三千を奏進としての様式に乗せて著されたものであり、今は政治機構の主権は国民にある点から、現在の為政者である首相以下国会議員、及び国民に立正安国を建言することが重要である。

古河良啓師（現代宗教研究所研究員）

『立正安国論』と立正安国の思想は日蓮聖人の生涯を通して展開された。大切なことは、ファンダメンタリズム的に受け止めるか否かではなく、立正安国の教えと、根本にある釈尊と法華経に帰命する日蓮聖人の普遍的な思想・精神を領受し、時代の進展に応じた実践を模索することである。日蓮聖人は釈尊の仏弟子として何をすべきかを常に問われた。私達も仏弟子として、現代社会の問題に応じ、人々の生老病死に寄りそうと共に、立正安国の精神の下、正法に基づく価値観、死生観、但行礼拝や利他の精神などを伝え、社会の進むべきあり方を示すことが必要。

水谷進良師（現代宗教研究所研究員）

日蓮聖人以来、江戸時代までは『立正安国論』に『申状』を添え、為政者や公家・武家等へ安国論の精神を進言する諫暁活動が盛んに展開されてきた。それは当時、公権力を諫めるということは、同時にそこに属する民衆を諫めることにもなったからである。ただし議院内閣制の今、総理大臣や国会議員の信仰を是正することに大きな意味があるとは考えにくい。先師の諫暁活動の精神を重んじつつ、令和の今、日蓮聖人ならばどういう行動を起こされるかという普遍的な日蓮思想を、僧侶自身が主体的に考えなければ、立正安国の実践は有名無実になるのではないか。

このように活発な議論が展開された。東日本大震災や今般のコロナ禍。国難に遭遇する度に着目されるのが『立正安国論』である。その教示に誠実に向かい合い、答えを模索していく行動こそ、日蓮門下として忘れてはならない姿勢である。